

## 発達障害児急増 – その現状と対応

私が以前ストックしておいた新聞や雑誌の切り抜きの中に、今から12年前（2012年）のある雑誌に、次のような内容の記事が掲載されていたのでご紹介します。

この調査は10年ごとに行われ、2年前（2022年）にも実施されました。記事のカッコ内は2年前のデータですので、比較してお読みください。

### 15人（12人）に1人！発達障害児急増

12月5日、文部科学省は春に実施した調査の結果を発表した。そのデータによれば、発達障害の可能性のある公立の小中学生が、全国で推定61万3千人（70万人を超える）もいるという。これは全体の6.5%（8.8%）にあたり、40人学級であれば2～3人（35人学級であれば3人ほど）在籍している計算だ。

「発達障害は脳の機能不全です。主なものには知的能力に問題がないのに、聞く・話す・読む・書く・計算する・推論する力のうち、特定なものを苦手とする『学習障害（LD）』。多動性、不注意、衝動性が特徴の『注意欠陥多動性障害（ADHD）』。そして、社会性、興味、コミュニケーションについて特異性が認められる『アスペルガー症候群』や『自閉症』などがあります」（文部科学省中央教育審議会専門委員で教育ジャーナリストの品川裕香さん）

（カッコ内の数字以外は原文のまま）

LDやADHDは中枢神経系の機能不全と推定されていて、親のしつけや育て方、教師の対応などが原因ではないと言われていています。これらの障害は、誰の責任でもないことを最初に認識した上で心得ておきたいこととして、次のようなことが指摘されています。

- できないことよりも、できることに注目する。
- 叱ることよりも、ほめることを基本とする。
- その子の持っている障害や特性に対する知識を持つ。
- 彼らを取り巻く教室環境や人的環境を整える。
- 学校と保護者が連携する。
- すべての改善を目指さず、ひとつの目標をスモールステップで取り組む。
- 禁止事項を増やすより、「～すれば…できる」という条件付き許可を増やす。
- 成功体験を増やし、自尊感情の低下やいじめなどの二次障害を防ぐ。

そして、LDやADHDの症状が顕著な場合は、心理相談や教育的対応だけでは解決できない問題も出てくるので、関係機関との連携や医学的支援も必要だということです。

本町でも例外ではなく増加傾向にあり、その対応として、各学校へ特別支援教育支援員を増員しています。また、教員対象の特別支援教育に関する研修会を実施しています。今後も、継続して実施する考えでいます。

なお、この点に関してご心配なことがありましたら、いつでも学校や教育委員会、教育相談室へご相談ください。

親が子に伝えるもの

<b>物を送るのではなく心を送る！</b>	
<p>A子は、高校1年生です。 地震の被災地に救援物資を送るという学校からの呼びかけがありました。 夜、A子が、 「これはもう着ない。これもいらない。」 と言いながら、出す物を選んでいました。 すると、母親が側に来て、 「何やってるの？」 と聞きました。A子は、 「地震の被害者に物を送るの。」 と答えました。すると、母親は、 「あなたが、今一番着たいのはどれ？」 と言いました。A子が 「これとこれは、まだ着たい。」 と答えました。母親は、 「それじゃ、それを出しなさい。着たくない物を送っても、相手はちっとも嬉し</p>	<p>くないでしょう。今着たい物を送ったら、あなたの心が相手に通じるよ。」 と言いました。 母親は、物を送るんじゃない、心を送るんだと言いたいのでしょうか。 その数日後、新聞記事に、 「中国残留孤児45名が来日、全国から物が寄贈された。しかし、使い古しの衣類ばかりで、中には洗濯しない物もあり、団長は『私達は物貰いではない。日本は豊かだが、心は貧しい』と言い、品物を放棄して帰った。」 とあるのを読んだA子は、「お母さんはこのことを言いたかったんだ」と悟りました。A子が母親になった時、その子にもこの心を伝えることになるのでしょうか。</p>

**教育相談室の活用の仕方！** .....



